井端 泰彦 名誉教授　略歴

昭和13年５月20日生，大阪府枚方市
昭和32年３月　大阪府立高津高等学校卒業
昭和39年３月　京都府立医科大学医学部卒業
昭和39年４月　同附属病院で医師実地修練開始
昭和40年４月　同大学院医学研究科（生理系）入学
昭和40年５月　医師免許証取得
昭和44年１月　アメリカ合衆国アルバートアインシュタイン医科大学へ留学（Research Associate）
昭和44年４月　医学博士（京都府立医科大学，甲第102号）
昭和46年１月　京都府立医科大学助手(第一解剖学教室)
昭和46年４月　同講師（同）
昭和47年４月　同助教授（同）
昭和50年７月～平成12年10月
　同教授（第二解剖学教室）
昭和60年３月～平成元年３月
　学生部長
平成12年４月～平成18年３月
　京都府立医科大学学長
平成18年４月　京都府立医科大学名誉教授
平成18年４月～平成23年３月
　京都府特別参与
平成18年４月～平成23年３月
　京都府保健環境研究所長
平成20年５月～令和５年５月
　学友会会長
平成23年４月～平成24年３月
　京都府保健環境研究所顧問
平成23年４月～令和２年３月
　京都府特別参与（医療・介護・福祉包括担当）
平成23年６月～令和元年６月
　京都地域包括ケア推進機構理事長
令和２年４月～令和７年１月
　京都大原記念病院グループ　高齢者共生型まちづくり拠点　大原健幸の郷　館長

受賞・叙勲
平成26年４月　瑞宝中綬章
平成31年１月　京都府文化賞特別功労賞
令和２年６月　京都府特別感謝状

井端泰彦名誉教授を偲んで

京都府立医科大学名誉教授・井端 泰彦 先生が，令和 7（2025）年 1 月 19 日（日）にご逝去されました．享年 86 歳でした．井端先生のご逝去に際し，旧第二解剖学（現・生体機能形態科学）教室を引き継ぐ者として，また本学の両解剖学講座の一員として，心より哀悼の意を捧げます．

井端先生は昭和 39 年に本学をご卒業後，附属病院にてインターンを終えられました．当初は心臓血管外科を志しておられましたが，心臓の刺激伝導系を研究されていた大塚 長康 先生（後の岡山大学解剖学教授，故人）が助教授として在籍し，佐野 豊 先生（故人）が教授を務めておられた第一解剖学教室に大学院生として入学されました．心臓に関する研究から出発されましたが，次第に海馬の電子顕微鏡を用いた組織学的微細構造の研究にも取り組まれ，学位を取得．やがて脳研究へと進まれました．当時は未開拓であった海馬の研究において，苔状線維終末の超微構造や亜鉛の組織化学的解析を精力的に進められました．

学位取得後は，佐野先生のご紹介によりアメリカ・アルバート・アインシュタイン医科大学に留学され，神経内分泌学の第一人者たちのもとで，卓越した研究環境の中，貴重な経験と知見を積まれました．Pappas 教授の指導のもと，海馬への線維投射，神経細胞と膠細胞の関係，蝸牛神経核の超微構造などについて研究されました．日本では大学紛争が激化していた時期でしたが，井端先生はその影響を受けることなく研究に専念できたことを，後年，大学紛争の意義に思いを馳せながら語っておられたと伺っております．

帰国後は，佐野先生のもとで助手，講師，助教授を歴任され，昭和 50（1975）年に第二解剖学教室の教授に就任されました．その後は，視床下部－下垂体系を中心とした神経内分泌機構の研究に尽力され，免疫組織化学や電子顕微鏡を駆使して，神経内分泌ニューロンの投射，発生，モノアミンとの共存などを深く探究されました．1980 年代後半からは，現在では概日リズムの中枢として知られる視交叉上核に着目し，その機能形態学的研究に力を注がれました．網膜からの入力やグリア細胞との関連性にも注目 し，『Frontiers in Neuroendocrinology』 に招待論文を執筆されるなど，国際的にも高い評価を受けられました．また，武田薬品工業との共同研究では，Prolactin Releasing Peptide や RF-amide など新規ペプチドの研究にも取り組まれました．

学会活動においても，神経解剖学や神経内分泌学の分野で多大な貢献をなされました．日本解剖学会，日本組織細胞化学会，日本内分泌学会，日本神経内分泌学会，日本自律神経学会，日本電子顕微鏡学会の理事を長年務められ，特に日本組織細胞化学会では平成 11 年から 3 年間にわたり理事長を務められました．また，第 96 回日本解剖学会総会（平成 3 年），第 4 回国際脳研究連合会（IBRO）学術集会シンポジウム（平成 7 年），日本組織細胞化学会第 40 回記念学術集会（平成 11 年），第 73 回日本内分泌学会学術集会（平成 12 年）など，数多くの国内外学会を主催され，学会の発展と国際的な交流に尽力されました．

井端先生は「人との出会いと和」を重んじ，個々の希望や個性を尊重しながら，その長所を伸ばす教育を貫かれました．25 年にわたり第二解剖学教室の教授として指導にあたられ，多くの優れた研究者・教育者を育てられました．広島大学，名古屋大学，東北大学，神戸大学など，全国の主要大学で教授として活躍されている卒業生も数多く輩出されました．

私が本学教授に就任した際，Sox 転写因子研究の第一人者であり，私の学位審査の副査でもあった大阪大学生命機能研究科の近藤 寿人 名誉教授より，次のような言葉を頂きました．「君が主宰する教室は，我々京都大学理学部生物学科で発生生物学を志してきた者にとって，とても大切で思い入れのある場所です．井端先生のもと，この教室からはアフリカツメガエルなどを用いた研究で成果を挙げた同門が多数巣立っています（東北大学・仲村 春和 先生，国立遺

伝研・平田 たつみ 先生，名古屋大学・藤澤 肇 先生など）．その教室を君が率いることは喜ばしいことですが，そうした背景を自覚し，しっかり取り組んでください」．また，大阪大学から異動する際には，阪大の解剖学教授陣からも「府立医大の解剖学講座は，我々が目標とするほどの輝かしい実績を持つ講座です．そのことを肝に銘じ，努力を続けてください」と激励をいただきました．これらの言葉は，井端先生が日本のライフサイエンス分野において果たしてこられた偉大な貢献を物語っていると思います．

また，井端先生の教室のご出身には，大阪大学医学部旧第三解剖学講座名誉教授であり，名著『標準組織学』（医学書院）の著者としても著名な藤田 尚夫 先生（故人）もおられます．私自身，学生時代に藤田先生の講義を拝聴し，深い感銘を受けました．講義では組織学にとどまらず，絵画や文学にも及ぶ多彩な話題が盛り込まれ，先生の豊かな教養がにじみ出ていました．その教育姿勢は，今も私の教育観に大きな影響を与え続けています．こうした偉大な先生方を輩出された教室に，自分が身を置いていることに誇りを感じています．

井端先生は学部教育にも熱心に取り組まれ，組織学，神経解剖，感覚器，泌尿器，呼吸器など多岐にわたる分野で講義・実習を担当されました．昭和 60（1985）年からは学生部長として，教養課程から専門課程への移行制度の見直しなど，カリキュラム改革にも尽力されました．学生の成長を喜ぶ一方，学業をまっとうできなかった学生にも常に心を寄せられるなど，生涯を通じて教育者としての温かな眼差しを持ち続けておられました．その姿勢は，田中 雅樹 先生（令和 7 年 3 月末退官），八木田 和弘 先生，天谷 文昌 先生，故・久 生男 名誉教授，久保 俊一 名誉教授，福居 顯二 名誉教授ら，多くの学内教授陣を育てられたことにも表れています．

平成 12（2000）年には本学学長に就任され，教授職を辞し，専任体制に移行されました．平成 18（2006）年までの 6 年間にわたり，医学・医療の変革期に明確なビジョンを持って課題に取り組まれ，大学の発展に多大な貢献をなされました．新病棟・外来棟の整備，PET センターや高度救命救急センターの設置による高度医療体制の整備，地域医療との連携強化など，附属病院の機能向上に尽力されました．また，大学院医学研究科の再編を通じて学際的研究の推進と若手研究者の育成に尽くされ，国際交流の促進や統合型カリキュラム導入による教育改革にも積極的に取り組まれました．さらに，公立大学法人化という大きな転換期にも，内部統治体制の整備を推進し，大学の自立的運営の礎を築かれました．教育・研究・診療の各分野においてバランスの取れた発展を図り，21 世紀にふさわしい医療人育成のための環境を整備され，本学の基盤を力強く支えてこられました．

私が平成 30（2018）年に本学に着任した際には，井端先生にご連絡を差し上げ，解剖学教育についてご助言をお願いしたところ，快くお時間を割いてくださり，親身にお話を聞かせてくださいました．その折，先生は「これまでがどうだったかは気にせず，君がやりたいように一所懸命やればそれでいい．ただし，学生たちが“学生時代の思い出”として真っ先に解剖実習を挙げてくれるような，そんな教育をしてほしい」とおっしゃり，不安を抱えていた私を大いに励ましてくださいました．

井端先生は生涯を通じて，恩師，友人，ご家族への感謝を胸に，ご自身のペースで着実に歩まれ，教育・研究・大学運営において温かくも芯のある姿勢を貫かれました．そのお姿は，教え子や後輩，関係者の心に深く刻まれており，今も尊敬と感謝の念とともに記憶され続けています．

井端先生，どうか安らかにお眠りください．そして，これからも天より京都府立医科大学をお見守りくださいますよう，心よりご冥福をお祈り申し上げます．

令和 7（2025）年 4 月

京都府立医科大学　大学院医学研究科
生体機能形態科学　教授
八代　健太

井端先生を偲んで

井端先生との出会いは，私が麻酔科の大学院生として，1990年に第二解剖学教室の門を叩いたことに始まります．それから実に35年にわたってご指導を受けました．大学院時代，第二解剖学教室には，精神科，耳鼻科，整形外科，内科など，さまざまな教室から院生が出入りしており，他教室の院生や第二解剖学で学位を取得された先輩方と知り合う機会にも恵まれました．当時，教室に出入りされていた方々の中から，後に多くの臨床医学や基礎医学の教授が生まれています．

大学院では，先生より免疫電顕法を教わり，伸び伸びと研究に取り組ませていただきました．熱心に研究にしていたことを評価くださったのか，大学院4年次には解剖学教室助手として残るよう強く勧めていただきました．麻酔科の田中教授も快く了承してくださり，解剖学教室の助手として採用される運びとなりました．大学3年次に解剖学を学んでから15年の時を経て，今度は教える側となり，講義や実習の準備に当初多くの時間を要しました．その際，教える側の心得として「君，教育は愛情と情熱やで」とのお言葉をいただきました．この一言は，私がその後，解剖学教員を続けていく上での芯となる教えになりました．先生は，宴会で飲んで前夜どんなに遅くなっても，1限目の講義に遅れることはなく，また，講義内容も毎年改訂を加えるなど，常に周到に準備されていました．特に神経解剖学の講義では，配布プリントの枚数が100枚にも及び，試験を受ける学生の準備がいかに大変かと思わず同情したものです．

京都府立医科大学学長として2000年に教授を退任される前年まで，2年間留学させていただき，それが研究者としての道を進むことを定めたように思います．また，退任されるまでは，教室のレクリエーションとして，皆でハイキングや海水浴に出かけたり，夏の終わりには解剖の技師さんが鴨川で採った天然アユでバーベキューパーティーをしたりと，先生とともに過ごした楽しい思い出は数多くあります．先生は水泳もお得意で，一人で沖まで泳ぎに行かれ，皆で心配したこともありました．

学長を辞されてからも，長年にわたり学友会長を務められたこともあって，毎年年末には学友会館にて先生を囲み，門下生が集まって旧交を温める会が，コロナ前まで開かれておりました．私が生体構造科学の教授に就任した折には「解剖学教育の後継者ができた」と殊の外お喜びくださったことを，昨日のことのように思い出します．

このように，井端先生を通じて多くの出会いと学びをいただけましたことを，心より感謝申し上げます．どうぞ安らかにお眠りください．

京都府立医科大学　生体構造科学教室
田中　雅樹

大学院時代の第二解剖学教室

井端泰彦名誉教授を偲んで

井端泰彦先生（昭和 39 年卒，元学長，名誉教授，前学友会長）が，令和 7 年 1 月 19 日にご逝去されました．

井端先生は，名実ともに京都府立医科大学の一時代を体現された先生でした．ご経歴など公的な詳しいご紹介は解剖学教室においてなされると思いますので，ここでは，ごく簡単に井端泰彦先生のご経歴やご研究を紹介し，続けて私にとって「恩師」である井端先生の人柄を偲ばせる個人的なエピソードなどを紹介させていただきます．

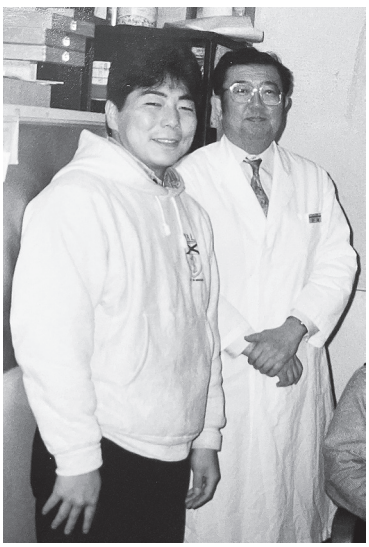
井端泰彦先生は，本学を昭和 39 年にご卒業後，1 年間のインターンを経て，佐野豊先生の第一解剖に大学院生として入られました．助手，講師，助教授を経て，昭和 50 年 7 月に京都府立医科大学第二解剖学教室の教授に就任されましたが，この時，36 歳になられたばかりという若さでした．また，平成 12 年 4 月より 18 年 3 月まで 2 期 6 年間にわたり本学学長を務められました．

研究面では，電子顕微鏡を駆使した脳の超微細構造に関する研究を柱として，佐野解剖学の伝統である機能形態学を独自に発展され，解剖学領域に新たな潮流をもたらす我が国のリーダーのお一人として活躍されました．研究の対象も，海馬から黒質線条体経路，そして視床下部を中心とする神経内分泌と展開され，全国でも屈指の解剖学教室として一目置かれる存在でした．機能形態学は，動かない形だけを見る古典的形態学の概念を超え，その機能をも解明することを目指した挑戦的アプローチであり，この学問的系譜に連なっているのが岡村均先生（現京大薬学部特任教授）そして筆者へと続く概日リズム研究の流れです．平成 30 年度には京都府文化賞を受賞され，その受賞理由には「脳の構造と機能に関する研究により，概日リズム（体内時計）研究等の発展に多大な貢献」とあります．まさに，井端先生が発展させた京都府立医大の機能形態学が高く評価されたものでありました．

また，この時の京都府文化賞では，「人材育成」も受賞理由にあげられています．井端先生の直接のお弟子さんだけでも 10 名以上の教授を育てられました．さらに，第一解剖から第二解剖の教授として着任された当時，岡田節人先生が創始された京都大学理学部生物物理学科出身の研究者や大学院生が多く在籍されていましたが，発生学研究グループの研究も 10 年以上にわたって支援されました．その中から，藤澤肇先生が名古屋大学理学部教授に就任されるなど，多くの著名な先生方が巣立っていかれました．ご自身の着任前から在籍していたスタッフそれぞれの研究を応援し著名な研究者として輩出した教室運営は特筆すべきものがあると思います．

さて，ここから，筆者個人の視点から井端先生を語らせていただくことをお許しください．私は，天谷先生（現本学麻酔科学教室教授）とともに，井端先生の最後の弟子でした．指導教授として学位を与えた大学院生としては，私が最後かもしれません．ただ，私にとって井端先生とは，直接的な研究指導というよりは，一人の人間として向き合い育ててくださった父親のような「恩師」としての存在でありました．

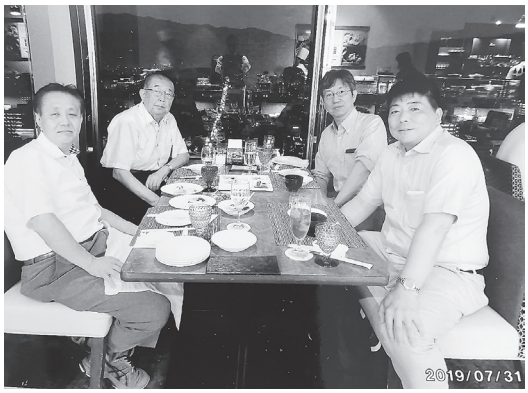
井端先生と私の出会いは，私が 2 回生の春，



井端先生と 6 回生の筆者（1995 年 3 月）

第二解剖学教室の門を叩いた時に始まります．学生研究といえばそうなのですが，私の場合は「意識高い系」のそれではなく，そのとき危機的状況にあった私が崩れそうになる自分を立て直すための切実なチャレンジとしてお願いしたものでした．その直前に高松で開業医をしていた父が脳幹出血で倒れ，手術中に一時的な心停止もありながらなんとか一命を取り留めたものの，意識は戻ることがない状態が続いていました．遠く離れた京都でこのまま大学生を続けることが許されるのか，それまでの人生で初めて味わう不安と恐ろしさの中で，押しつぶされそうな数週間を過ごしていました．しかし，「父も良い大学だと言っていた」との母の言葉に背中を押され京都に戻ったのでした．当時の私は，希望を胸に府立医大に入学したものの，教養課程でモチベーションを失いかけていました．しかし，このような危機にあって，医学研究の道に挑戦したいという初心に戻って学生生活を送ろうと決め，頼ったのが井端先生でした．

井端先生は，お顔は怖そうですが本当に懐が深い先生でした．「今日から来い」と無条件に受け入れてくださり，井端門下生としての生活が始まりました．研究自体は当時助教授だった岡村均先生に指導を受けていましたが，井端先生からは本当に多くのことを「対話」を通して学びました．医学知識や具体的な研究内容というより，いろいろな気づきや学びがある人間としての成長の機会をいただいたように思います．研究にものめり込み，毎日夜遅くまで研究室に通い詰める生活を続ける中で，次第に本来の自分を取り戻し，自分の夢や希望にチャレンジする力も回復していきました．ここから現在の私に至る道が連続していることを思うと，間違いなく今の私があるのは井端先生のおかげです．入局した第三内科の先生方や，他学での14年間で出会った方々の中にもメンターと定めて師事している先生は何人もいますが，井端先生に出会わなければこれらの先生方との出会いもなかったと思います．



八代教授の着任に際し，井端先生を囲む会
（2019年7月）

「対話」．私は自身の教授選考の際，教育理念を問われ「一人ひとりに向き合う『対話』を基盤とする」と申し上げました．その起源は，井端先生にあります．母校に帰ろうと決意したのも，井端先生からいただいたものを後輩に返したい，という思いからでした．「対話」の多くは，お酒を飲みながらだったように思いますが，学生であっても一人の人間として向き合い，人間「井端泰彦」が語られました．大学は本来，教育機関であり，「人づくり」こそが社会からの負託です．私は，私自身が井端先生との「対話」によって救われ，さらに府立医大の学生として得難い多くの貴重な機会をいただいた一人として，そのDNAをまた次の世代に受け継いでいかねばならないと思っています．

井端泰彦先生を思うとき，いつも二つの言葉が心に浮かびます．「寛容」と「愛嬌」．まだその境地に至っていない私にとって，もう井端先生が居られないという現実は，いまだに受け入れ難いものがあります．「井端先生的」な教授になりたいと願い続け，未だ叶わず仰ぎ見る巨樹の如き恩師．それが井端泰彦先生です．

井端先生，これからも天から見守っていてください．

京都府立医科大学　大学院医学研究科
統合生理学　教授
八木田和弘

井端泰彦先生を偲んで

京都府立医科大学名誉教授，元学長である井端泰彦先生が令和7年1月19日にご逝去された．享年86歳であった．

井端先生は大阪府立高津高等学校を卒業された後，京都府立医科大学に進学され，昭和39年にご卒業されてからのご経歴に関しては他稿に譲るが，研究者として，学長として，学識経験者として，日本の解剖学，そして京都府立医科大学ならびに学友会の発展にご貢献頂いただけでなく，京都府における医療・介護環境の向上にも尽力され，府立医大の150年の歴史の中で，特筆すべきご功績を残された．謹んで哀悼の意を表したい．

硬式テニス部の大先輩であった井端先生は，私が学生の頃はテニス部の部長をして頂いていたと記憶する．当時は鴨川の河川敷に土のコートが2面あり，金曜日の放課後が全学年の合同練習日であったが，井端先生は研究の合間に時間があればコートに出てこられ，練習にも付き合って頂いた．その頃の井端先生のテニス姿は今でも目に焼き付いているが，華麗でコンパクトなフォームであり，フラット系の球を打っておられた．体幹はしっかりしておられたが，以外にも（？）足が白く，スリムであり，女子学生の間でも話題になっていたことが思い出される．

私は大学を卒業してから，国立循環器病センター，海外と，学外を転々としていたため，お会いする機会はほとんどなかったが，再度お世話になりだしたのは私が海外から帰学した1997年からである．その時井端先生は栗山学長の下，副学長を務めておられた．私が心臓血管外科教授に就任したのは2004年だったが，その時には井端先生は学長として選考を見守っていただき，就任してからは励ましのお言葉を多く頂いた．その後退官されてからも時々お電話を頂き，大学の様子，教室の様子をいつも気にかけて頂いた．

2022年11月5日，府立医科大学創立150周年記念式典・祝賀会が催された．私は実行委員長を拝命しており，記念式典では閉会の辞を述べたが，井端先生には学友会会長としてご挨拶の言葉を頂いた．その時には井端先生は脊柱管狭窄症の手術後の後遺症のため車椅子で参加されたが，記念式典の京都国際会館メインホールの檀上に私が車椅子を押して登場し（図1），またスピーチの際（図2）も演台の横まで私がエスコートする役目を果たせたことは非常に光

図1．大学創立150周年記念式典で井端先生がご登壇（筆者がサポート）

図 2．大学創立 150 周年記念式典での井端先生のご挨拶．ご臨席を賜った彬子女王殿下（ステージ中央）からもおことばを頂いた．

栄であり，うれしく思っている．

最後に，井端先生が日本学術会議会員・連携会員を退任された時の挨拶として記された文を原文のまま紹介させて頂く．井端先生の研究，人材育成に対する姿勢がよくわかるかと思う．

「私の経験から申しますと，研究の重要性は，先行研究を行い，研究費を獲得することも重要でありますが，第一義ではないと思います．研究の重要性の大きな要素は研究のよろこびを感受することが最も大切ではないかと想います．私の研究室には医学生が何人も出入りしておりましたが，研究室のスタッフや大学院生の研究の様子をみたり，討論したり，また，自らが研究を行い，論文を発表した学生も居りました．そのような中で，卒業後，私の教室（研究室）に入局し，現在，他教室や他大学の教授を務めている人達も居ります．そのように研究の雰囲気を経験する中で，未知のものを発見することが大きな喜びを生み出すと共に倫理観を生み出すと考えます．現在，多くの大学において，研究に関する倫理委員会が設立され，いろいろ議論が行われておりますが，私は学生時代，大学院生時代からの研究に関する体験学習が最も重要だと考えております．」

根っからの研究者，教育者であられた井端先生に心から敬意と感謝を贈りたい．今後も京都府立医科大学の成長を見守っていただきたいと思う次第である．合掌

京都府立医科大学　学長
夜久　均（京都府立医科大学　昭和 57 年卒）